俳諧七部集

阿羅野
阿員外

七

911.3
八
7

曠野集員外

誰か華をおもはざらむ誰か
市中にありて朝のけしきを見む
我東四明の麓に有
て花のこゝろハこれを心とす
よつて佐川田喜六のよしの山
あさな〳〵といへる歌を実に
感ず

麦喰し雁と思へど別れ哉

此句尾陽の野水子の作なるを
芭蕉翁の傳へしをなをきゝ

笑しにはいつは田野へ居をうつして
実ハ世の感あむうし　あさき
ときる人の中に虎の物語さし
とうゐ進を飛る人あつらく
独色を愛しよそよし酒の
杉月ふへのうき酒のうたのとし
樵を愛て賓に下りて一壱
あるさといへるも賓の字老の
杜乃とうつあるそや杉居の
自我をきひて

素堂

麦をわる飛をまよお?飛ぬ鳥かうし

さうらくこの文人乃その一つの雲らく
とうけう飛しなとこ人宿き
我友も吟して

まさきし　かさす山家杉のけ住ふ　野水

樵の路もきそろよまのまて　荷兮

ものさ川うなるたてし年う利　越人

門杉石目待園のやまうひり　水

凪の月利をと秋乃うらく　兮

武士乃鷹うつ山も陰となし　人

志をりくつゐて猟の帰るさ　水

袋より経をとり出す書のうち、　今

浦ふき降ら絶えて色付もする　人

吉之足松の直ミ阿弥陀乃端　水

千句をなむ小山ゆかしう　今

姥さえも一室桜も咲誇り　人

あてもなき夕月夜ての飛さ　水

玉霰のみをき涙の雲かゝる扇子　今

秋萩なきも咲く浪人乃妻　人

ゆふゐの空ら西も東も鐘乃音　水

きふうすゞなる利根の川舟　今

身のほ秋てかくしとしてかき墨　人

家子やりしと網織らせて　水

ふらりとしてとき乃姫の市の場へまて　今

抓つまとやく人かへらしの井　人

柏木の脚気の比のつくしと　水
さゝやくとのこゑ聞えつる　今
月乃影ゝゝ合さくり辻お撲　人
秋さなゆゑらく李　墨乃酒桶　水
あの志く紙　けず接え起る着　今
うれしと走の姫　彼乃系絶　人
かゝしこまる諌よ涙にはあふ　水
火箸にてあつき　今

らくすその人とゝ人のうこ　人
衣せさとかて　池乃かへとて　水
むさの李教もしきさとゝへす　今
採くゝ表婦人生か根たの架　人
墨ろ次き正月五紙つ　水
大根きさゝて　いそかし　今

遠浅や浪に志めさす蜊とり　垂洞
はる花舟乃ゝ須磨のあま里　荷兮
のとけしやよさり泊に荷を解て　昌碧
百足乃櫂する葉にかゝる　野水
夕月の雲に白帆をさら旅　舟泉
夜寒の蓑を裾まくりさす　釣雪

萩乃露ところも志らぬ所そや　以筆
一駄ゆるして見も古綿　亀洞
そのゑ迄も着しまる宮弥々麻　荷兮
東すむ比丘尼は年一宗　昌碧
いくつともなくてあつらへ藏造　釣雪
湯殿まいりのもめむ引也　舟泉
涼しさや蓮をもてくる川の増　野水
こしかきれやゝ添　月　荷兮

秋風の女車の髭おとこ　亀洞
袖ぞ露けき嵯峨の法輪　釣雪
晴くもりおのさへくも地のおち　昌碧
ほそ山吹色とちらなるべし　野水
日乃いてやたゝみはさん腹すり　舟泉
んやなけ手土とし嫁あまた　亀洞
向まもし寒せるほどの小ふとんにて　荷兮
垢離かく人の着物の番　昌碧

配所まて干魚のかけ減覚えて　釣雪

三のうらふくるまきのおそく　舟泉

むく起ておひつきて赤膝足　野水

門をあけり茶子よひこむ　荷兮

いろこみえし足擬町の藪渡し　亀洞

松毎はなきぬるしこれもとこ雨風　釣雪

ふ色とわ家ふちのもの下ゟ片月　昌碧

やゝもつ秋乃やそあこのてな游　野水

つゝくるか松風のうゆる寮の窓　舟泉

みつ志本を伊尼安房乃小湊　亀洞

夏の日やえるおる泥の照付て　荷兮

桶のかつゝ手入しまひかるし　昌碧

人なきに脚をさしてゆより　釣雪

ついろくる六なる擔進　野水

見しば錦しきりまのゐ　舟泉

柳のうしろ路かきまきり乃卯　拾芳

夕霧の湊船まてうそまもん　冬文

きよしさやまえゆる月影　荷兮

秋草のそてもおもき征いさかれ　松芳

弓ひきあぐる勝相撲とく　舟泉

早も赤もの拾ハむところある　荷兮
あるかし秋の中秋木のそし　冬文
火鼠の皮衣をためらしく　舟泉
涙又珠しゃうら笑はつ　松芳
高くとも紫鵑まつしてそ落ぬは余る　冬文
酒の半に膳をもちてあり川　荷兮
来年は順礼もをすにかしき　松芳
くまで双紙の絵書たえよとへ　舟泉
なかよくもうちたえたる恋の負　荷兮
月のたはらや花る井乃戸　冬文
灯にまよふ松脂ひつてまちの風　舟泉
瑠璃珠をつまみて脇息のうへ　松芳
隠居も入歯にあまへの志ハかへるを　冬文
十月のさくみちかしあまるし　荷兮
山里の秋をうつしと生鰯　松芳
手拭かふつてへるやいさむ　舟泉

さら〳〵とかの流を渡る月の秋　荷兮
馬乃とゝ也沙そゝるのはなく〳〵　冬文
さひしさを釜井の宿のあき雨　舟泉
蓬姆まへ〳〵蕎麦あふつく中　松芳
つく〳〵と郷見る女ののをかしく　冬文
蹊娟の〳〵提婆品よむ　荷兮
けしの花さてあるをするとく　落まより　松芳
味噌する音もその隣しさへうし、　舟泉

菜畠乃門さきうけて薪分　荷兮
浄舟し〳〵とあてうになふ　冬文
春秋朝赤貝をさくしあつく焼　舟泉
新見えともとる物ね旅つら　松芳
ゐきたうたや瀑布をかひな　おどこゑて　冬文
載しつ面白き山口の家　荷兮

かそへきす落葉心のれもあき　荷兮

雨のわの飛ふこそてる戸の口　野水

引│捨し車ハ琵琶のかとさぎさて　同

あさうなくも人のうかれ　荷兮

月の秋蕨乃きさこてあるや　同

一明けるあし露乃きこゑけ　野水

初あらしちらせの露の坊主花　水
菜畑蜻蛉むれてとちもとろひして　今
土肥を多くしてうちよせらく　仝
下刈たとす神そおうより　水
通路のつひもとこけて逃かへる　仝
六位すあらし恋のうハささ　今
代さハるこて世もしと清れひく　仝
銭一貫て鯉一節　水

同ク能若ほうく挟くく舞　仝
茶碗に菜とゆよみらなり　今
天仙蓼し冷食あさし名竹管　仝
うち崩ほうけく看経の中し　水
たく人とな菜て足ゆうら足　仝
又せもしき法ついてやる　今
駒のやと此ほらて信濃より甲斐　水
秋のあらしく背偉揺揺　今

尤つゝくよそ沖まゝし　生見魂　水
八月乃月のちくさやいるゝさく　兮
山乃端よ松と椛とのかすゝの紅葉　水
きはさゝるゝくゝくとする　兮
昇るきはや服のきゝろを引なん　仝
太鼓たゝ兄り階子乃あるゝ　水
ころく出家する末貫の艸枕　兮
乳たゝのくゝやし舞ゝされる　水

思ふともまゝぬ都まて一三年　仝
庇をつきて住居かく見せ　兮
三方のおもつりし世にまみる　仝
供奉乃艸鞋を谷へころみ　水
涙しやい塩大原嵯峨の花　仝
人ねんよりはるの川岸　筆

御書林 岡田町

月さしのほるころ六畳の中ゑさしかくる
おもしろさに柄をさしよくしつらへ
同し宗鑑法師の句をおもひ出しけれは
支の越後よりおなしく句を評をやすくつかはす

月に柄をさしたらはよき團から

蚊のおるはもし夜をよき越路かな　越人

さ川くらき雨誰か恋へてこよふん　傘下

梅ハ花のさく頃の嫁きのころ　同

志ら木柱つくおきへしらかはも　人

使の者つれあまりいまもち給　同

あれこれと猫の子を選るさわぎにて　筆
とし寄るまでもあほうらしかり　下
とこてやる手の節えさへ拙さよ　同
まくら松もうけに泣かするのか　人
大將乃人に法華をこまざかく　同
月さへ夕さ錫杖縄を津　下
喰ふ椿も又くふさきに皆温し　同
秋乃ぎしきれ細みるまゝ　人

わりなくいつか此世を背くべき　同
寝覚めかゝる書の文字はゆるむ戸　下
花の賀にいくらくうつするゝ波弟　同
其のあの糊代こそさ蔓くの持　人
うち翔く浦の客屋の板すくゑ　同
内へはいりとてかなしやかゆる　大　下
醉しさかのみお段らさ此奴　同
〳〵志ずつ今宵雨乃降出し　人

歌あはせ揃ふ鍾首ないとうし　同
まき献立の入れちの日をかゝぞ　下
竹其墨紙油にほして押かくし　同
白をとおこせんとかしもそ花　人
嬉く風に意のころくちのふらしと　同
半をこちす　鐘も〳〵乃秋　下
むつくと月ころ類の絵ほ描て　同
人の読にきくみ川をも古し　人

にぎはしく瓜や茄や荷ひ也　下
干ち流ゑての弥は町中　人
おろくやし小詩の家にの時　下
皆同年々や戸に仏　人
百万にこ〳〵ひ所にむ事　下
田楽に椀もくさかな掛し　人

深川の夜

雁かねもしつかにきけハからひすや　越

酒しゐならふこの比の月　芭蕉

藤はかま誰窮屈にめてつらん　仝

理をはなれたる秋乃夕くれ　越人

瓢箪の大きさ五石ぞくのりや　仝

風にふかれて帰る市人　芭蕉

なに事も長安は是名利の地　仝
醫のおほきこそ目のつかひなれ　越人
いそがしと師走の空に立出て　芭蕉
ひとり世話やく寺の跡とり　越人
此里に古き玄番の名をつたへ　芭蕉
足駄はかせぬ雨のあけぼの　越人
きぬ〴〵やあまりかぼそくあてやかに　芭蕉
かぜひき給ふ声のうつくし　越人
手もつけず昼の御膳もすべりきぬ　芭蕉
物いそくさき舟路なりけり　越人
月と花比良の高ねを北にして　芭蕉
雲雀さえづるころの肌ぬぎ　越人
破れ戸の釘うち付る春の末　仝
人をはかりしこそ恐ひきかへし　蕉
家なくて服紗につゝむ十寸鏡　人
ものおもひゐる神子ものいへ

人まていまた法然乃白紙ゐる　人
弥陀之鏡を堂より片隅　蕉
女とこそれ嵐のあるく気はさ　人
垣穂のさし芽露にこそ深く　蕉
あやにくに掛ぬ妹かり夜の紋　人
河のほしそたのなみさつむを　蕉
此月踊るも踊るまて御さされ　人
旅も遠く藤あやしいはふり　蕉

帆さる間まつよと浦なかく　人

静御前く舞をとりもる　角

空蝉の雛現乃形の花ろしよ　仝

あとさきのみをたらす金二分ある　人

いとをしきは子と他人のえ付きこり　仝

やけどあとをしてえしつゝまれ　角

閏髪さ耳をつまつるさしえを　仝

負人をもつゝめ月のに破舟　人

そゑいろの富士を清書く秋の紙　仝

色かえゆうしいたる草乃ノ一範　角

饅頭ちょう絆しさ祢く包さるる　仝

うきせよつれて死ぬ人ハ損　人

西王母東方朔も同まハえす　仝

よしや鸚鵡の舌乃ことゝさ　角

あらきなるやうそへさきもて夜の妻　仝

燕の歎きよみあおよ夜さのまん　人

やゝ杉垣に鋏をしれて　角

茶つくる肴を師にきたなりけり　仝

文殊宿の本尊に服乃さは　人

ゆゝ川の鐘を春に鳴力　仝

完いちま塵をちらしも草枕　角

ひとあきとりて伊勢の入網　仝

酒月さ不断桜と詠けるや　人

念者法師を秋のあはれの縁

冬まく冷やさらしれと富士の子 書きた　仝

弓みて入れる実あきのまと　角

なさたゝらりも食の猿守随 ゆひて　仝

ま乃さて鳥の奴鳥士の園とて　人

花の色まみ傳つき腕とりや　仝

もしろ友へき嘆續乃巷　仝

疱瘡皃の透とほるほど歯のしろさ　人

唱哥のこゑ壱分もらひける　雪

あさふみも飛脚くのうきを成　同

後をひよ人せいつのまにかさき　越

とられたる油あかするまゐりすき　人

此程をかなへる浪人　帒

菜畑を礁まうてと一川脘　雪

明日も蝶そらて宵の月新　越

去年ぞの群ぐさなる女房　人

つきぶの醫者乃後姿や　雪

ちるむり目もくるれども生ぬ　越

ようふくるとき何をいふらん　人

野水

神鳴やことしのひゞる桐の木に

月のみしうきもえくの紀起　落梧

山川や鵜の喰ものをさかすらん　今

舩の遠からしんゑかくなる　野水

杉垣はさま押合月の草臥つ　同

あく〳〵としくしも櫃ゆら萩　落梧

川越の歩よさゝれし縄の雨　水

ねぶと痛くのる秋のしきさゝなきさ　梧

わせてをかりなくかくす様の下　水

すゝきねぶ汁のうまりえひ　梧

更る夜の帰るそびつしとあ波ろく　水

こそくり起す桐伝えゝ傳　梧

峯の松あちあちありを見おくり　水

旅をおもうちのんき離さ　梧

きつく猫もいとふ地蔵堂　梧

きらしとのやる馬にまくさのせて　梧

うらふ府中を餘程ふつきり　水

雨せまくきれちきるゝ面白や　梧

柳ちつるもの也倒の葭道　水

影なつく月てそさり飛五十間　同

寂しさ秋浅女まちかねてみけり　梧

白くと上すく紛さるゝせまし　水

恭ふくても世まつりくへの肩　仝

新田の干魚備るゝ川ほとり　梧

誰とらぬとも年之見て見て済　同

春も雨乃しくしくと峠さえすゞ　水

れくふらしこ繕へと雲雀鳴也　梧

一 里に炭賣はいつもくる能也　一井
かきひの先に絹氷る朝　嵐蘭
さゝくわや正木まじりし後の庭　胡及
肩きぬをつけ酒によふ人　長虹
夕月に入さは早き揃ゆき、

里深く踊なり二三日　長虹

其司の妻をわすれぬく墓　胡及

関ヶ原くも泪あり和の志みく化　一井

葛籠とくさてやかく文　嵐弾

うらくしも寝絶なの湯と（とうす）　胡及

雪ゆく東年の越路雪鋤　長虹

なくてはよそをあひて八ヶ月　嵐弾

蛤さしを女中や一　一井

涼風を腹吹ちる月涼し　長虹

みるみか加しきの化佗佇の代魂　胡及

若者乃さし矢射てわる前の際　一井

蒜よし姫香を遠すかり　嵐弾

はるのよ飛あかきしる膝る急ん　胡及

氏の子乃綿乃錦の落つ　長虹

老若しまる内もさいくも度　嵐弾

座敷おもしある数屋を絹きり　一井

本丸さへにあるりかし松の枝　長虹
稀にうる人〳〵乃奥　胡及
弐年さなりて条の跡もなき　一井
満くしかせなくつい座く月　嵐弾
盞るとく障子の隠咲うそきき　胡及
こゝろ知しも志ほむ萩のえ　長虹
涼みさ揃入道の系のちる尺　嵐弾
衣引のかるくかりき　着　一井

舞なりと此一ヶ所も吟ぬし　長虹
片風ゐちうてる萩　白雨　胡及
板敷てく縁あて庭の図　一井
きう乃結蛇きるまゝき尾丸　嵐弾
ぬく〳〵　せゝ月道の志沢如雲　長虹
見わすれすかゝゝあつし　胡及

三都
發兌
書肆

江戸日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛
同 日本橋通弐丁目 山城屋佐兵衛
同 日本橋通弐丁目 小林新兵衛
同 日本橋通四丁目 金花堂佐助
同 浅草茅町二丁目 須原屋伊八
同 芝神明前三嶋町 和泉屋吉兵衛
同 芝神明前 岡田屋嘉七
大阪心斎橋安堂寺町 秋田屋太右衛門
京寺町通松原下ル 梅村三郎兵衛
同 町 勝村治右衛門
同 寺町通高辻上ル 同 伊兵衛

第6518号 昭36.3.14